

謹
賀
新
年



天満宮

題字／後西天皇御宸筆

季刊
新年号

平成27年1月
Vol.5

特集

◆ 天正の大茶湯を偲ぶ

御茶壺奉献奉告祭 献茶祭を斎行

◆ 一ノ鳥居 閑院宮載仁親王御筆「天満宮」の扁額奉掲

北野天満宮の由来

当宮は御祭神に菅原道真公（菅公）をお祀りした全国天満宮・天神社約一万二千社の宗祀（総本社）の神社です。

天神信仰発祥の社として今から千年余り前の村上天皇天曆元年（九四七）六月九日、御神託により平安京の乾の地にあたる北野に御鎮座致しました。

天徳三年（九五九）右大臣藤原師輔卿が御社殿を造営、一條天皇により北野祭は官祭に与り、「北野天満宮天神」の神号を賜り、さらに朝廷・皇室の崇敬を受け二十二社に加列、臣下として初めて官幣中社に列格され国家鎮護・皇城镇護の神として崇められました。

寛弘元年（一〇〇四）、一條天皇がはじめて行幸されるに及び、以来歴代天皇の行幸も二十数度に亘り、將軍家や有力大名の崇敬を受けております。

文道大祖・風月本主と崇められた菅公は、和魂漢才の精神で誠の心を以って学問に勤しまれたことから、学問をはじめ芸能・農耕・厄除け・至誠・冤罪を晴らす神として奉祀されています。

菅公は、千有余年の長い歴史の中で、人々の心の支えとなる神として、各時代の社会構造と相まって篤い崇敬をうけ、庶民・一般に至るまで「天神さま」と呼ばれ親しまれてきました。菅公が生涯一貫された「誠の心」は、日本人の感性として現在にも生きています。

現在の御社殿は慶長十二年（一六〇七）豊臣秀吉公の遺命を受けた豊臣秀頼公の造営で、八棟造という豪壮な建築様式を誇り国宝に指定されています。

菅公の御神霊を祀る北野天満宮は、御墓所・太宰府天満宮と共に全国天満宮の宗祀と称され、日本文化の礎、学問の神・天神信仰として篤く信仰されています。



【シンボルマーク】

平安京の乾（北西）に位置する北野の地・天門をイメージし、星欠けの三光門（三辰信仰）から星梅鉢を北極星と捉えた星の軌道と、神社の象徴である一の鳥居を描き、北野天満宮の信仰的特徴を捉えたマーク。

表紙写真説明 初詣参拝者で賑わう御本殿前

正月の御本殿前では家族連れや若者、受験生らが手を合わせ、無病息災・家内安全・入試合格など様々な願いを込めて神前に祈りを捧げる。初詣参拝者は三が日だけでおよそ50万人を数える。



新年の御祝辞

謹賀新年

年頭にあたり、謹んで聖寿の万歳と皇室の弥栄を言祝ぎ奉り、国運の隆昌と氏子崇敬者皆様方のご健勝とご多幸を衷心よりお祈り申し上げます。

旧臘、天正の大茶湯をしのぶ献茶祭が、裏千家千玄室大宗匠、千宗室家元、千敬史様、ご宗家三世代揃ってのご奉仕により厳肅盛大に斎行されました。誠に感激の極みにて、当宮と茶文化の歴史上、輝く一ページとなりましたこと感謝御礼申し上げます。

さて、北野天満宮は平成三十九年に行われる千百二十五年半萬燈祭に向け、一昨年より平成の大改修、境内整備工事に着手致しております。御祭神菅原道真公所縁の庭園を再現すべく、紅梅殿を境内西広場に移築、国宝北野天神縁起絵巻に描かれた景観を蘇らせる本格的な庭園整備を計画致しております。さらに楼門下ではいよいよ神社社会館の建築に取り掛かり、天神信仰発祥の地、全国天満宮宗祀の神社として、尚一層の教学的活動、芸能文化、茶道文化等、様々な文化発信を奨めて参る所存でございます。

今後とも、ご神縁深き皆様には天神信仰の発揚と北野天満宮護持の為、格別なるご理解、ご協力の程お願い申し上げます。

平成二十七年乙未元旦



北野天満宮
宮司 橘 重十九

名譽宮司		宮司		権宮司		禰宜		権禰宜		出仕		巫女		事務員		職員																																													
梶	季嗣	橘	重十九	加藤	迪夫	梶	道嗣	松吉	真幸	神原	孝至	加藤	晃靖	中野	忠雄	小竹	史浩	玉井	清文	嶋田	貴績	松大路	和弘	黒木	崇史	東川	楠彦	白江	秀宜	田中	副央	湯浅	和雅	上寫	将司	山本	茜	田淵	咲弥	伊藤	友香	近藤	亜利奈	田村	鎮子	益田	真実	上田	彩華	庄村	正男	本郷	晃司	澤井	美里	足立	義人	村上	和美	高鍋	涼

天神さまと私

北野天満宮と裏千家

茶道裏千家 家元 千宗室



御本殿にてご奉仕される裏千家坐忘斎千宗室家元



京都府出身。同志社大学卒業。
臨済宗大徳寺管長・僧堂師家中村
祖順老師のもとで参禅得度。
祖順老師没後、妙心寺盛永宗興老
師のもとで参禅。
平成十四年、裏千家十六代家元継承。

北野天満宮は、早春の神苑一円に百花の魁として梅が咲き誇り、秋の御土居の紅葉もことのほか美しく、豊かな自然に恵まれた宮です。また学問の神様としての菅原道真公をご祭神とするため、幼い頃から折に触れ祖父母に連れられてお詣りし、特に元旦には必ず家族でお詣りするのが我家の慣例になっています。

天正十五年（一五八七年）十月一日に関白太政大臣・豊臣秀吉公によつて催された「北野大茶の湯」には、千利休、津田宗及、今井宗久といった当時の名だたる茶頭をはじめ、多くの茶の湯者が参加し、これまでは僧侶、武将、豪商等に限られていた茶の湯が、各階層にまで広がるきっかけとなりました。

この大茶の湯を契機として天満宮と茶道は殊のほか縁が深く結ばれ、明治十三年一月十三日には第一回の献茶式が厳修されました。その後は今日まで、毎年十二月一日に表千家、裏千家、武者小路千家、藪内家、久田家、堀内家の六家が輪



列立される千宗室家元・千玄室大宗匠・千敬史氏ら



上七軒西方尼寺に残る千利休居士が用いた井戸



千敬史氏



鵬雲斎千玄室大宗匠

番で献茶のご奉仕をさせていただいています。そして各家が茶道を通じて様々な形で天満宮と繋がっています。

当家では、この献茶式には家族が揃って参列させていただくことになっており、私も幼い頃から参列し多くの思い出があります。昨年の十二月一日には、家元を継承して二回目の献茶式をご奉仕させていただきました。

大茶の湯の折に利休が使用した井戸が、天満宮の東側の天台宗真盛宗の西方尼寺に現存しています。

この寺には、利休手植えの五色八重散椿もあり、一本の椿に様々な色の花を付けることで有名です。

後に裏千家五代不休斎常叟の娘（六代六閑斎泰叟の妹）祖仙尼が出家して三十世住職となります。そのご縁もあって、四十七世光善尼は裏千家十四代淡々斎宗匠から裏千家で初めての名誉師範の称号を受け、その後、代々の住職が裏千家茶道を熱心に指導しています。

この西方尼寺は、天満宮に隣接しており、京都五花街の中でも最古の歴史を誇る上七軒の中にあり、上七軒の芸妓・舞妓はこの寺で日頃から茶道を習っています。道真公の祥月命日である二月二十五日には毎年梅花祭が催されますが、芸妓・舞妓が艶やかな着物姿で神苑において野点席を担当し、初春の京都の風物詩の一つにもなっています。

また神苑には、北野大茶の湯の折に細川三斎が使ったといわれる井戸があり、十二代又妙斎ゆかりの松向軒や明月舎と云った由緒ある茶席も残されており、毎月定例の茶会が催されて茶道愛好者たちで賑わっています。

このように北野天満宮では今も脈々と茶道文化が受け継がれており、今後ともこの茶道文化の発信基地としての役割を担い続けていきたいと切に願っています。文末になりましたが、北野天満宮の益々の栄を祈念致しております。



裏千家ご宗家揃い献茶祭斎行



北野大茶湯址碑

「天正の縁」を今に伝える献茶祭、厳かに斎行



ら献茶祭保存会役員による口切式

四百二十余年前、豊臣秀吉公が催した歴史上名高い「北野大茶湯」を縁とする献茶祭が十二月一日午前十時から本殿において裏千家千宗室家元のご奉仕により、献茶祭保存会役員を始め茶道関係者ら多数参列の下、厳かに斎行された。あいにくの雨模様にもかかわらず、社務所を始め境内ほか主要な所に設けられた六つの茶席はどこも超満員の盛況となり、北野天満宮とお茶との縁の深さを改めて感じさせた。

太閤ゆかりの「北野大茶湯」

「北野大茶湯」は、天正十五年（一五八七）十月二日、秀吉公が千利休・今井宗久らとともに亭主を務め、万民を集めて開いた大茶会。数々の名器が展覧され、名だたる武将が集い、吉田神社の祠官吉田兼見が『兼見卿記』の中で「北野経堂から松梅院の近傍まで一間の空所もなく八百余の茶席が造られた」と綴っているほどの規模の大きさだった。

その名残として境内には太閤井戸が残り、明治十九年には大茶湯三百年記念献茶式が、また昭和十一年には五日間に及ぶ三百五十年記念の「昭和の大茶湯」が大々的に開催されている。



御本殿へと進む各生産地からの御茶壺道中行列



大倉治彦氏・鈴鹿且久氏・畑正高氏

境内にある明月舎・松向軒の二つの茶室では毎月月釜が掛けられるほど当宮と茶は密接な関係にあり、そうした故事・伝統を引き継いで斎行される献茶祭は当宮独特のものであり、「北野の献茶祭」として知られている。

古式ゆかしく 御茶壺奉献奉告祭・口切式

献茶祭に使用する抹茶の原料となる碾茶^{てんちゃ}を奉献する御茶壺奉献奉告祭が十一月二十六日午前十一時から本殿で斎行された。

慣例により山城六郷（木幡・宇治・菟道・伏見桃山・小倉・八幡・京都・山城）の茶生産者と茶業関係者によって茶壺に詰められた碾茶は、産地毎に唐櫃に納め、一ノ鳥居から本殿までの道中を、紺の着物・姉さんかぶりに茜たすきの茶摘み娘を先頭に御茶壺行列を組んで運ばれた。表参道や本殿前には多くの参拝者が集まり、この行列を見守っていた。

次に茶壺を神前に供えて奉告祭が斎行され、参列の茶師や茶商・献茶祭保存会役員が玉串拝礼し、献茶祭が無事斎行されるよう祈った。

引き続き口切式が行われ、献茶祭保存会の役員が古式にのっとり次々茶壺の口を切り、色鮮やかな碾茶を茶舟の上に盛り上げて、一々丁寧に検知が行われた。

碾茶は口切式の後、抹茶にされ、献茶祭を迎えた。



碾茶を検知する宰領渡辺孝史氏とそれを見守る裏千家村上利行氏



御茶壺清祓の儀



坐忘齋千宗室家元によるお点前

神前での献茶祭 裏千家家元三代揃ってご奉仕

在洛の四家元・二宗匠（數内家・表千家・裏千家・武者小路千家・堀内家・久田家）が六年ごとの輪番で務められる北野の献茶祭。今年は裏千家家元のご奉仕となった。

坐忘齋千宗室家元が御祭神に献上する濃茶・薄茶二盃を謹点、続いて鵬雲齋千玄室大宗匠が豊太閤を祀る豊国神社の神前に献上する濃茶を、千敬史氏が薄茶を各一盃ずつお点てになり、裏千家宗家の親・子・孫三代揃ったの神前奉仕となった。

この後、橘重十九宮司が祝詞を奏上、千宗室家元、献茶祭保存会の代表らが玉串拝礼し、祭典を終えた。

本殿内は身動きできないほどの参列者で埋まり、多くの人が西廻廊に設けられた中継画面で献茶祭の模様を見守った。

併せて豊国神社にて献茶祭斎行

本殿での献茶祭の後、千宗室家元らは豊国神社へ移動され、引き続き祭典を斎行した。

この日、社務所奥の間には裏千家今日庵の本席が、同じく神楽殿には拝服席が設けられたほか、明月舎（倉斗宗寛氏）・松向軒（松向軒保存会）・上七軒歌舞練場（上七軒お茶屋組合・上七軒芸妓組合）・西方尼寺（善田好日庵氏）



豊国神社献茶祭



豊国神社へ向かう裏千家ご宗家の方々



上七軒芸舞妓によるお点前



裏千家今日庵による本席（社務所奥の間）



松向軒保存会による副席（松向軒）

に副席が設置され、さらに三光門前西広場にはそば席、絵馬所には菓匠会による恒例の和菓子の展観などが行われた。雨が降ったり止んだりのあいにくの空模様だったが気温は下がらず、寒さをあまり感じさせない一日となり、境内は紅葉狩りの参拝者と一碗を楽しむ和服姿の女性たちで終日大賑わいとなった。

献茶祭に協賛 「菓匠会」が銘菓を展示 「京の師走」を菓題に珠玉の一品

絵馬所で行われた京都の老舗和菓子店で組織する「菓匠会」による飾り菓子の展示会は、この献茶祭に協賛する恒例行事。

同会は、江戸時代の禁裏御用達「上菓子仲間」の流れを組む二十店で組織されており、毎年統一の菓題によつて各店が選りすぐりの一品を出展している。

今年の菓題である「京の師走」に基づき、各店が「賑わう」「大路を繋ぐ」「年の瀬」「初雪」など、思い思いの題をつけた京の師走をイメージする和菓子を展示した。器に盛り付けられた和菓子は、いずれも色合い・形とも素晴らしく、まさに芸術品といったところ。訪れた人たちは「すごい」「お菓子とはおもえない」などとささやき合いながら一点一点、食い入るように見つめ、カメラに収めたり羽織袴姿で案内する菓匠会員に質問を投げかけたりしていた。



「菓匠会」による飾り菓子の展示（絵馬所）



華やかな上七軒歌舞会の副席（上七軒歌舞練場）

一ノ鳥居 閑院宮載仁親王御筆「天満宮」の扁額 奉掲

かんいんのみやことひと

約90年前の輝き再び



お披露目された一ノ鳥居扁額「天満宮」

しかし長年の掲出によってさびや腐食が激しくなってきたため、今年八月鳥居から下ろし、解体して塗り直しや金箔を施すなどして修復作業を進めていた。

この日の取りつけ作業は、午前十一時ごろからクレーン車を使って一時間がかりで行われた。高さ約十一メートルの一ノ鳥居の真ん中に「天満宮」の扁額が取りつけられると、見守っていた多数の市民や崇敬者から、どよめきの声と拍手がわいた。

なお、大正十年に奉納されたこの「扁額」は、当時の記録によると実際には、翌十一年五月十九日午前九時より額曳きによって運ばれ、午後六時に当宮に到着。翌二十日に足場が組まれ、二十一日の午後奉掲された。奉掲には約二万人もの市民が詰めかけ、お祝いの餅まきが行われる予定だったが、危険なため中止になったという。

当時の当宮の神苑は現在よりずっと広く、一ノ鳥居は下ノ森にあった。

一ノ鳥居の扁額の修復作業が終り、十一月五日午前十時半から本殿で修復奉告祭を斎行、この後鳥居に奉掲され、青空の下「天満宮」の文字が鮮やかに浮かび上った。

この扁額は、大正十年当宮の崇敬団体、梅風講社皆燈講によって鳥居とともに奉納された。銅板製で縦二・二八メートル、横二・四八メートル、重さ約五百六十キロ。

額字である「天満宮」は、閑院宮載仁親王が御揮毫、扁額の背文字には「大勲位功二級元帥陸軍大将 閑院宮載仁親王御筆」と記されている。載仁親王は靖國神社記念館「遊就館」の館名額を揮毫されたことでも知られる。

また閑院宮家は、第一一三代東山天皇の皇子直仁親王を初代当主に、世襲親王家として万世一系たる皇統の護持に寄与してきた宮家であり、この扁額はご皇室と当宮との深い御縁を表す貴重な文化財として掲げられてきた。



完成した扁額「天満宮」清祓の儀

人力で大鳥居に額を奉掲する様子（大正11年）



額を掲げ御前通りを進む行列（大正11年）



新たに発見された元字の掛け軸



修復された扁額「天満宮」

北野の光

天満宮の
新春の祭典・行事〔一月～二月〕



1月1日 歳旦祭

新年最初の神事。午前7時から宮司以下神職によって本殿で斎行され、年頭に当たり皇室の弥栄・国家国民の隆盛・世界平和併せて氏子崇敬者の弥栄を祈願する。

1月2日

筆始祭並びに「天満書」奉納

午前9時から本殿で御遺愛の硯などを整え、書道の神でもあった菅公の御神徳を偲び、この日から神前書き初め「天満書」を始めることを奉告する。

「天満書」は、絵馬所で4日まで行われ、子どもたちが書道の上達を願って力強く書き初めをし、書いた作品を奉納する。これに家庭で書き、奉納された作品を加え、例年約4,000点が23日午後1時から31日午後3時まで西廻廊および絵馬所で展示され、展示初日に書家の先生方によって審査が行われる。



1月2日まで

華道家元池坊京都支部献花展

元旦から神楽殿で開催され、立花・生花・自由花の形で生けられた正月らしい生け花が初詣参拝者の目を楽しませる。



1月3日

新春奉納狂言

新春奉納狂言が午後1時から神楽殿で、猿楽会と茂山良暢氏によって行われる。



1月5日

そろばんはじき初め

午前10時から絵馬所で行われ、小学生ら約400人がそろばんの上達を願ってはじき初めをする。長さ5.5メートル、四百桁もあるジャンボそろばんが毎年話題となる。



1月25日 初天神

一年で最初の縁日であり、表参道を始め境内周辺は、多くの露店が並びひときわにぎわう。すでに受験シーズンに入っており、本殿前や牛舎前は若者の行列ができる。



1月5日まで 楼門に西陣糸人形

西陣のつくりもの人形「糸人形」が楼門内部左右に展示される。西陣織工業組合の依頼により毛利ゆき子西陣和装学院学長の監修指導のもと同学院と西陣連合青年会が毎年テーマを変えて制作する。

2月
25日

梅花祭

九百有余年の歴史ある祭典



菅原道真公の祥月命日に当たる2月25日午前10時から本殿で梅花祭が厳かに斎行され、御祭神の御遺徳をしのぶ。神前には七保会の会員が調製した「梅花の御供」「紙立」という2種の特殊神饌が奉饌される。また、貞明皇后御参拝の古例により宮内庁京都事務所長が皇后陛下の御代拝として参向される。

境内では美しく咲いた梅花の下、上七軒歌舞会の女将・芸舞妓らの奉仕により「梅花祭野点大茶湯」も行われる。公開中の梅苑を含め境内は参拝者で大賑わいとなる。

2月3日

節分祭と追儺式

午前10時から本殿で節分祭を斎行し、一年間の災厄を祓った後、午後1時から神楽殿で茂山千五郎社中によって伝統の「北野追儺狂言」が奉納される。上七軒歌舞会の芸舞妓による日本舞踊の奉納もあり、最後に出演の狂言師と芸舞妓が神楽殿の上から威勢よく豆をまく。

当宮は京都の「乾（北西）の隅」の守り神として創建されて以来、災難除け・厄除けの社としても篤い信仰があり、節分には「四方詣り」と称して当宮など四社寺を参拝して無病息災を祈る習慣が根付いている。



〈主催〉 京都大学 「モノ学・感覚価値研究会」 〈共催〉 北野天満宮

三月七日から十五日

当宮で「悲とアニメ」展

大震災四年目の十一日には鎮魂の茶会と能舞

東日本大震災の「悲しみ」を生きる力に

三月七日から十五日 当宮で「悲とアニメ」展

四年目の十一日には鎮魂茶会と鎮魂能舞

京都大学「モノ学・感覚価値研究会」は、三月七日から十五日まで社務所や神楽殿・茶室・駐車場など当宮境内一帯で「悲とアニメーモノ学・感覚価値研究会アート分科会展」を開催する。東日本大震災における「悲」をアニメ（靈魂・靈性）に触れることにより生きる力に変えようとの願いを込めており、そうした企画意図に関わる芸術作品を展示するとともに震災四年目に当たる三月十一日には、鎮魂茶会や移動舞台車上での鎮魂能舞などの上演を計画している。

「鎮魂茶会」は三月十一日の午後一時から三時まで被災地に対する服喪と再生を祈念して行われる。茶碗は、被災地に二点以上の陶器を寄贈している造形美術家の近藤高弘氏が「命のウツワプロジェクト」において制作したものをを用いる。

「鎮魂能舞」は、同六時から七時の間、当宮駐車場に移動舞台車を配置し、ライトアップの中、被災地と世界に対する未来の希望を祈念して行われる。移動舞台車は、やなぎみわ氏（現代美術作家・京都造形芸術大学教授）の作品。能舞は、河村博重氏（観世流能楽師・重要無形文化財・京都造形芸術大学客員教授）と本展監修者で神道ソングライターの肩書も持つ鎌田東二氏（京都大学こころの未来研究センター教授）の共演で行われる。観覧は無料だが、雨天の場合は順延される。

「悲とアニメ」展

平成二十七年三月七日（土）～十五日（日）

【監修】鎌田 東二 【企画】秋丸 知貴

【展示出品者】

大西 宏志

上林 健一

山本 健史

近藤 高弘

【移動舞台車・鎮魂能舞等】

やなぎみわ

河村 博重

鎌田 東二 他

岡田 修二

坪 文子

渡邊 淳司

丸谷 和史

勝又公仁彦

松生 歩

三宅 一樹

狩野 智宏

スティーヴンギル 他

天神信仰と「悲とアニメ」展
開催に寄せて

京都大学こころの未来研究センター教授
鎌田 東二

延暦十三年（西暦七九四）十一月八日、桓武天皇は「山背国」を「山城国」に改名する詔を出し「平安京」に遷都した。この「平安京」は水の都であり、ものづくりの都であったが、同時に「祈りの都」でもあった。「皇城鎮護」とその「平安」が祈られ、「御靈信仰」も「鎮護」と「平安」には不可欠の信仰であった。

上田正昭京都大学名誉教授は「天神信仰」には中国や朝鮮半島の「天神信仰」と日本古来の「天つ神の信仰」と「菅原道真公の信仰」という三種があり、北野天神信仰にはそれらが重層していることを指摘された。また鎮魂には支配者の鎮魂と民衆の鎮魂の二種があり、支配者の御靈信仰は恐れることであるが、民衆の御靈信仰はその力を自分たちのパワーにして幸せを呼び込むものという対照があることを指摘された。中世には、菅原道真（八四五～九〇三年）という優れた政治家・文人・学者が「天満大自在天神」とか「太政威徳天」とかの称号を付与された「天神」という「神」に「成神」していく天神信仰形成過程があったが、「天神」という神格の基層をなすのは、北野の地に「火雷神」が祀られていたことにあった。そこに王城守護神、撰録神、学問神などの神格が重層的に付加され織

り込まれていった。雷という自然の恐るべきエネルギーの中に「ちはやぶる神」の神威を感じとっていた心性が御霊信仰や皇城鎮護や平安の希求と重なって天神信仰を独自の厚みのあるものとした。

その北野天満宮の地で、平成二十七年三月七日（土）から同十五日（日）までの九日間、許しをえて「悲とアニマ展」を開催する運びとなった。会期は「京都国際現代芸術祭 2015 PARASOPHIA」の初日に合わせた。会場は北野天満宮社務所、神楽殿、茶室などを予定している。また、東日本大震災が起きた三月十一日（水）には、造形美術家の近藤高弘氏主宰の「鎮魂茶会」とアーティストのやなぎみわ氏が台湾で製作した移動舞台車（ステージトレーラー）にてさまざまな芸能・パフォーマンス（能舞「天神」・舞・観世流能楽師河村博重・十楽・鎌田東二や、京都伝統文化の森推進協議会の啓発紙芝居など）を上演する予定である。



やなぎみわ「日輪の翼」のための移動舞台車 於横浜トリエンナーレ2014 新港ピア会場

この「悲とアニマ」展をなぜ北野天満宮で実施させていたのだと申請したのか、その企画趣旨を簡単に述べてみたい。

いうまでもなく、北野天満宮は御祭神として菅原道真公をお祀りする神社である。だが、人神として菅原道真公をお祀りする以前から北野の地に

は雷神信仰や天神信仰があった。その自然神信仰の上に人神としての菅原道真公への鎮魂と顕彰と讃仰（信仰）が加わった。

つまり菅原道真という「人」が「怨霊」になり、その後「神」になったのは、北野という場所にその土壌と秘密があった。もともとこの土地に息づいていた天神信仰、すなわち雷と稲作豊穰（自然の驚異と恵みの表裏一体）の基盤の上に菅原道真公への思慕と讃嘆と鎮魂が接木されて定着し、強力な北野天神信仰を生み出していったのである。

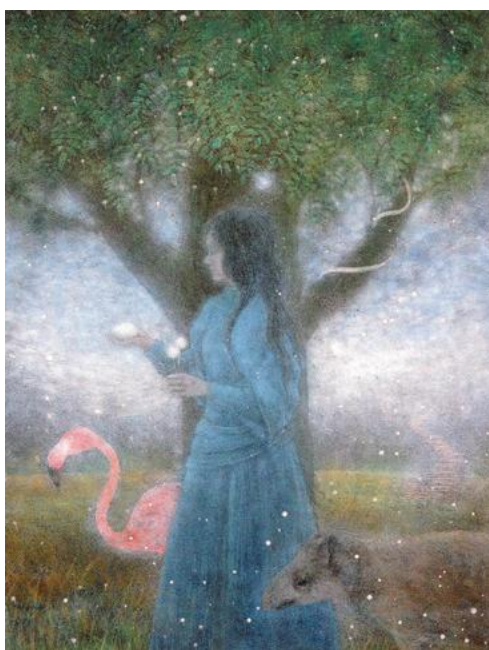
わたしたちの「悲とアニマ」展は、直接的には東日本大震災を機に、その「悲」を、生死を越えた永遠のいのちに昇華していく「アニマ（靈魂・霊性）」に接続したいという悲願を持っている。この「悲」を、生きる力や霊性Ⅱアニマに転換する信仰こそが北野天満宮の信仰の本質だと思いがゆえに、わたしたちはこの展覧会を北野天満宮で開催したいと考えた。

開催主催者の京都大学「モノ学・感覚価値研究会」は、二〇〇六年度～二〇〇九年度日本学術振興会科学研究費助成事業「モノ学の構築—もののあはれから貫流する日本文明のモノ的創造力と感覚価値を検証する」研究会として発足し、現代における日本の感受性の意義や有効性を「モノ学・感覚価値研究」として学問的に追求してきた。「もののあはれ」から「もののけ」までの「モノ」観や美意識の変遷の研究と表現を試み、その過程で、二〇〇八年秋から芸術領域のアート分科会が発足し、日本的感受性の芸術的表現を理論や実践で探求し、五年間さまざまな研究・表現活動を積み上げてき、その集大成として「悲とアニマ」展（展覧会＋シンポジウム＋パフォーマンス）を開催する。

昨今、東日本大震災、近畿大水害、各所の台風被害、御嶽山噴火など、国内外で天災も人災も多発している。このような現状の中で、一つの芸術芸能による鎮魂供養の試みとして、一宗一派も宗

教の違いも超える、「悲とアニマ」という広大無辺の大悲・大慈への普遍的な祈りと鎮魂を実現し、死者への供養と生の活力としたい。

「悲とアニマ」展における「3・11」開催の「鎮魂茶会」と「鎮魂能舞」は、豊臣秀吉が一五八七年に催した「北野大茶湯」や出雲の阿国が初めて歌舞伎踊を演じたという来歴を念頭に置いたもので、平安京・京都の地から伝統に基づく新たな表現を社会発信しようとするものである。企画趣旨をご理解いただき、ご参会いただきたい。



社務所 大広間・前室（松生歩絵画作品）

鎌田東二（かまたとうじ）先生 略歴



一九五一年徳島県阿南市生まれ。國學院大學文学部哲学科卒、同大学院文学研究科博士課程修了。岡山大学大学院医歯学総合研究科社会環境生命科学専攻博士課程単位取得満期退学。文学博士（筑波大学）。宗教哲学・民俗学・日本思想史・比較文明学専攻。神道ソングライター。

石笛・横笛・法螺貝奏者。現在、京都大学こころの未来研究センター教授。NPO法人東京自由大学理事長。京都伝統文化の森推進協議会会長。身心変容技法研究会代表（<http://waza-sophia.coocan.jp/>）

北野の光

斎行された祭典・行事

〔十月・十二月〕

厳かに一條天皇行幸始祭

一條天皇行幸始祭が十月二十一日午前十時から本殿において厳かに斎行された。

寛弘元年（一〇〇四）、一條天皇が初めて当宮へ行幸された日に当たり、長くこの日に祭典が斎行されてきたが、昭和二十三年以来途絶えていた。行幸以来千十年になる昨年、約六十年ぶりに行幸始祭として、



この日の重儀を再興した。
橘宮司が祝詞を奏上、皇室の弥栄と国家国民の安寧、天神信仰の更なる昂揚を祈念した。

行幸始祭

菅公しのび余香祭

古式ゆかしく献詠披講

『重陽後一日』の名詩を作られた御祭神菅原道真公をしのぶ余香祭が十月二十九日午後二時から本殿で斎行され、引き続き恒例の献詠披講式が古式ゆかしく執り行われた。

菅公が右大臣の位にあつた昌泰三年（九〇〇）九月、清涼殿での「重陽の宴」に召され、『秋思』の詩を詠まれ、その詩に感銘された醍醐天皇から御衣を賜った。
一年後、配流先の大宰府で菅公は、その時の栄華を追想され、「去年の今夜清涼に待す 秋思の詩篇独り

賜を断つ 恩賜の御衣今茲に在り 捧持して毎日余香を拝す」との『重陽後一日』の名詩を作られた。

余香祭は、この故事にちなむ祭典で、久しく途絶えていたが、大正八年、重陽の節句の旧暦九月九日（新暦に換算して再興され、以来毎年この日に斎行されている。

献詠披講式は、余香祭の日の恒例行事。今年の兼題は「徒然」で、全国から寄せられた献詠の中から濱崎加奈子氏（歌人、同志社大学特別講師）の選による十三首を車座になった向陽会（冷泉為弘会長）の会員らが綾小路流の独特の節回しで披講した。

神前には黄と白の菊が飾られ、神職・向陽会員らは全員、冠に小菊をかざして祭典・披講式に臨んだ。



余香祭

◆平成二十六年 余香祭献詠披講選歌

つれづれに思ふわが身のか弱くも
風である日を過ごすよるこび

武曾豊美

日めくりに書き込む予定限られて
命いとほし秋の徒然

若狹静一

徒然にかき留められしくさぐさは
在りし都のおもかげ伝ふ

仁枝尚子

心寄する方なき日々のつれづれに
やがて花鳥の言を知るなり

朝比奈崇子

我もまた物思へばとる水茎に
いにしへ恋ふるつれづれの人

田口稔恵

古き家に松影わたる風の音に
もの思はるつれづれの時

撰者 濱崎加奈子

つれづれにものをこそ思へ庭つ鳥
かけの垂尾の秋の夜長を

向陽会会員 榎戸孝雄

つれづれと雲居ながむるその先の
同じそら思ふ人の心は

賀茂御祖神社権禰宜 田中明仁

いくかへり染めてはさほふ露時雨
ぬれてまされる神苑つれづれ

八坂神社禰宜 橋本正明

あき深み静けき中に虫の声
徒然として物思ひける

賀茂別雷神神社権禰宜 安井正明

つれづれと今日かぞふれば千年余り
菅公の稜威あまた思はる

神田神社宮司 平野修保

もの悲しすかはらの音も身にしてみ
徒然と聴くやまと言の葉

向陽会会長 冷泉為弘

徒然の木枯らし吹きて落ち葉踏む
日暮らし待てり傾れ御土居に

北野天満宮宮司 橋重十九

平成二十七年 献詠兼題

▼一月 本	▼二月 類	▼三月 桃
▼四月 花曇	▼五月 玉	▼六月 襲
▼七月 夕風	▼八月 瓜	▼九月 待宵
御旅所 芋葉	▼十月 刈田	余香祭 鹿
▼十一月 凜	▼十二月 祈り	

神前に新穀など供え新嘗祭を斎行
今年の豊作に感謝し、厳かに



新嘗祭が十一月二十三日午前十時から本殿に氏子崇敬者ら約六十人が参列し、厳かに斎行された。

神前には今年収穫された稲穂や白米、醸造されたばかりの白酒を始め、海・川・山の幸、また氏子崇敬者が丹精込めて作った野菜などが供えられ、豊作に感謝するとともに氏子崇敬者の家内安全・家業繁栄を祈願した。

新穀に感謝する新嘗祭の歴史は古く、国家の大切な行事として飛鳥時代の皇極天皇の御代に始まったと伝えられ、現在でも宮中恒例祭典の中の最も重要なものとされている。

新嘗祭

七五三詣

子どもの参拝で境内華やぐ

秋は七五三詣の季節。十月から十一月の終りにかけ、境内は七五三詣の子どもたちで賑わいを見せ、華やいだ風景となった。

とくに十月終りごろからはピークとなり、土曜・日曜・祝日は、親に手を引かれた子どもたちでごった返す賑わいとなった。洋服姿が多い中、羽織・袴の男の子や振袖姿の女の子もおり、あちこちで参拝者の被写体となっていた。

本殿で神妙な表情で御祈禱を受けた後、おさがりの千歳飴などの授与品を手にした子どもたちは、少し照れた表情ながらもうれしそうに境内を歩き回っていた。



七五三詣

馥郁と菊の香

小林、岩下両氏が献花

菊愛好家の小林浩（京都市左京区）、岩下友行（同山科区）の両氏が今年も丹精込めて栽培された菊を献花された。菊花は本殿の両側に展覧され、参拝者の目を楽しませた。



献花

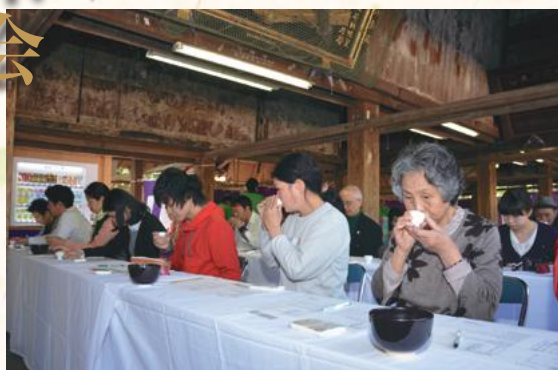
絵馬所で北野大闘茶会

第六回北野大闘茶会（京都市茶業組合、京都市茶業青年会主催）が十月十九日午前十時から絵馬所で開催された。

闘茶とは、名を秘した五種類の茶を当てる室町時代に流行した優雅な遊びで、一昨年からお茶との縁が深い当宮が会場となっている。

約三十人が参加し、玉露・煎茶各二種類、粗茶一種類の計五種類の茶を各三回ずつ味わい、茶の種類当てを競った。十五点満点中、十一点の高得点をあげた一位の男性に橘宮司から北野天満宮賞が贈られた。

大闘茶会



赤柏祭

秋から冬へ移り変わる季節の神事である赤柏祭が十一月三十日午前十時から本殿で斎行された。赤くなった柏の葉



赤柏祭

にご飯を包み、クルミといっしょに神前に供え、氏子崇敬者の無病息災を祈願した。

錦秋の御土居「もみじ苑」——多彩に奉納行事

史跡御土居「もみじ苑」が十一月一日から開苑され、美しく色づいた御土居のもみじを愛でる参拝者で連日にぎわった。

また、十五日からは恒例となったライトアップも始まり、十二月七日までの開苑期間中、数々の奉納行事も行われ、太閤秀吉公が築いた歴史の舞台は昼も夜も活況を見せた。

あでやかに日本舞踊を奉納

上七軒の舞妓さん

ライトアップ初日の十一月十五日午後五時から御土居内の特設舞台において上七軒歌舞会の舞妓さんによる日本舞踊の奉納が行われた。

舞妓さん三人が、ライトに浮かび上がるもみじを背に「京の四季」「重ね扇」「もみじの橋」の三曲をあでやかに舞い、もみじ狩りの参拝者を魅了した。

この日から特設舞台に隣接する茶室「梅交軒」で茶席が設けられ、もみじと濃茶の風流を楽しむ人がたくさん見られた。

昼も夜も 歴史の舞台に 紅葉映え



古武術の演武奉納

柔術天神真楊流を始めとする古武術四流の演武奉納が十一月二十三日午後五時から御土居特設舞台で行われた。

柔術天神真楊流の流祖は江戸後期の紀州藩士。楊真流と真之神道流という二つの柔術の修行をし、当宮に参籠祈願した際、楊が風になびく様を見て奥義を悟り、同流を創設した。

相手の動きに合わせて無理なく相手を制するのが極意とされ、組んだ瞬間に相手を投げる演武を披露し、拍手を浴びていた。またこの日、浅山一伝流体術・甲源一刀流剣術・正木流万力鎖術という古武術も加わり、迫真の演武奉納を繰り広げた。

もみじ連歌会



も数多く残されている。京都連歌の会は、こうした伝統を踏まえ、春には「梅ヶ枝連歌会」を、秋には「もみじ連歌会」を開催している。

京都連歌の会の「もみじ連歌会」が十一月三日午後一時から神楽殿で開かれた。「賦初何連歌」によって詠んだ作品を奉納した。

当宮は中世から江戸期にわたって連歌会所が置かれた。盛んに連歌会が張行された。奉納された連歌懐紙

奉納連歌

平成二十六年十一月三日

於 北野天満宮神楽殿

宗匠 光田 和伸
執筆 関本 稔

賦初何連歌

初折 表

余香祭

冠にかざす野菊や香に高し 宮司 重十九

丹をささげ持つ杜のもろ枝 和伸 裕雄

いろ見せてあすあさつての後月 まり絵 光代

たとふすべなみ調べあてなる 幸子 孝子

川の面にゆるりと舟の浮かぶらむ 満千子

かかなく驚の嶺わたりゆく 和行 敦子

ふり仰ぐ空より舞ひて細雪 景子 武彦

窓をあくれば霜白き庭 節子

初折 裏

彩雲を追ひて久しき旅衣 和行 敦子

引き結ぶ松ふたたびや見む 景子 武彦

ふたがみに思ひぞ消えむ詠はねば 節子

今こふらくとあやにくもなれ 秋風

秋風に黙して焼くや文の束

迎春準備が完了

未の大絵馬、楼門に奉掲
早くも正月ムード漂う

来年の干支、未を描いた大絵馬が十二月五日、神職らの手によって楼門に取り付けられ、早くも迎春ムードをふりまいた。

未の干支絵馬は、例年通り日本画家の三輪晃久さんが原画を描いたもので、無垢材のヒノキで造られ、幅三・三メートル、高さ二・二五メートル、重量百二十キロという大きなもの。神職・職員らが約一時間がかりで取りつけた。「もうすぐ正月」と、参拝者は気ぜわしそうに大絵馬の取り付け作業を見守っていた。

なお、この絵馬を小型にしたものが十二月十三日から枚数限定で授与される。



楼門の大絵馬



大福梅授与



事始め

大福梅の授与始まる

元旦の祝膳に使われる大福梅の授与が事始めの十二月十三日午前八時から始まり、授与所は初日から正月の縁起物の大福梅を求める参拝者の行列が出来た。

大福梅は、元旦に招福息災の祈りを込め、白湯の中に入れて頂く、梅とゆかりの深い当宮ならではの縁起物として人気が高い。境内約千五百本の梅の木から採取した梅の実を塩漬け・天日干しにして調製したものに裏白を添え、奉書紙に包んで授与するもの。

平安時代、村上天皇の御代の天曆五年（九五二）、都に疫病が流行し、天皇も病に罹られたが、梅干し入りのお茶を飲まれたところ平癒されたとの故事にちなむもの。庶民もこれにならって元旦に梅干し入りのお茶を飲んで一年の無病息災を願ったと伝えられている。「縁起のよい天神さまの大福梅をいただくのが毎年一年の始まり」という参拝者もあり、授与所はひと足早く迎春ムードとなっている。

巫女の心得を学ぶ

初詣に向けて研修会開く

初詣参拝者の応接に当たる正月巫女奉仕者の研修会が十一月二十三日午後二時から社務所大広間などで行われ、約百人の学生が神職から参拝者の接し方などについて学んだ。

白衣・緋袴に着替えた学生は、まず本殿に参拝してお祓いを受け、巫女として無事奉仕できるよう心を引き締めた。

この後、社務所大広間などで神職から境内の説明を聞き、さらに参拝者に授与するお守りやお札についての概容を学び、受け渡しの心得について指導を受けた。正月には直接参拝者と接し、応対しなければならぬだけに参加の学生たちは真剣な表情で指導を受けていた。



巫女研修

献詠

濱崎加奈子選

菅公は詩歌に優れ、多くの名歌を詠われました。室町時代には「和歌の神」と仰がれ、さらに柿本人麻呂と山部赤人と並んで「和歌三神」と称えられています。

十月「にほのうみ」

十一月「夜もすがら」

つらつらに思ふ浮き世やにほのうみ
ともかくにもいまの夕風

福井県 武曾 豊美

夜もすがらすだくこほろぎさはがしく
やるせなきまで鈴虫の声

福井県 武曾 豊美

にほのうみスケッチをする子供等に
秋の茜が近づきて去る

大阪府 村島 麗門

お手玉や右手回しはやすけれど
左はかたし夜もすがらに

大阪府 村島 麗門

我が里の川に放てる雅鮎
みなにおの海辺に育ちしと聞く

岐阜県 波多野千寿子

にはかなる病に夫の倒れしを
こころもとなく夜もすがら看る

岐阜県 波多野千寿子

国籍を問ふこともなく鳥たちは
にはのうみにて羽根を休めり

京都市 若狭 静一

夜もすがらにぎやかなりし秋虫も
霜月に入り音いろ落して

愛知県 鈴木 幸子

鳩のうみ古称のいはれたづねれば
湖岸に爾保の名の郷ありき

愛知県 仁枝 尚子

夜もすがらラジオ深夜のものがたり
いにしへびととしばしまみゆる

京都市 今井 輝子

義仲の夢幻かにほのうみ
朝日とともに消え失せにけり

東京都 白石 雅彦

夜もすがら雨音聞きて明くる日の
雲なき空ぞ大和くはしき

神戸市 齋藤 興哉

沖つ藻のなびく黒髪さらさらと
細波よするにほの海かな

京都市 石山 裕菜

珈琲の苦さ身にしむ夜もすがら
別の生き方問ひページ繰る

京都市 若狭 静一

にはの海銀の波寄す秋の田に
金の波打つ近江うるはし

京都市 智野利恵子

夜もすがら尽きぬ語らい杯重ね
囲む友垣結びぞ固き

東京都 白石 雅彦

清かなる比売の鏡かにほのうみ
風に割かれて光いや増す

京都市 朝比奈崇子

夜もすがら今様唄ひしそのかみの
法皇しのぶ秋法住寺

長岡京市 智野利恵子

書読める眼上ぐれば夜もすがら
遠き灯ぞ窓にともれる

京都市 朝比奈崇子

夜もすがら後の月影歌の家
守る千余の年月語り

京都市 朝比奈崇子

【評】「鳩の湖の意味で、水鳥が集まる湖のこと。」「近つ淡海」というように、
都人にとって身近な存在。古来数々の歌に詠まれて来た。「にほの海や月
の光のうつろへば波の花にも秋は見えけり」(藤原家隆)

京都市 朝比奈崇子

【評】冬が近づくにつれ、夜の時間が長くなるという当たり前のことを実
感する機会が少なくなっているように思う。古人の歌をひもといて、人
と夜、また闇について思いを馳せる時間を作ってみてはいかがだろう。

愛知県 仁枝 尚子



祭事暦 (一月一日〜三月三十一日)

一月 一日 午前七時 歳旦祭
二日 午前九時 筆始祭

天満書(午前十時)
神前書初め(四日まで)
家庭書初め(五日まで受付)
元始祭
奉納狂言(午後一時)猿楽会・茂山良暢社中

若菜祭
若菜祭
末社伴氏社例祭

二月 三十一日 午後三時 書初め「天満書」授賞式
一日 午前十時 月次祭 御粥祭 成人祭
二日 午前十時 月次祭 御粥祭 成人祭
三日 午前十時 月次祭 御粥祭 成人祭

北野追儺式(午後一時)
追儺狂言 茂山千五郎社中
日本舞踊 上七軒歌舞会奉納
豆撒き

四日 午前十時 霞祭
地主社霞祭
紀元祭
末社稲荷社 初午祭

十五日 午前十時 月次祭
二十四日 午後四時 梅花祭前夕饗
二十五日 午前十時 梅花祭(中祭式)
夕神饗

野点茶会(午前十時〜午後三時)
上七軒歌舞会奉仕
月首祭
撰社老松社例祭

撰社福部社例祭
春祭(大祭式)
春季皇霊祭通拜式
撰末社春季祭

月次祭
梅風祭 八乙女舞奉納
夕神饗
撰社宰相殿社例祭

三月 一日 午前十時 月首祭
二日 午前十時 撰社老松社例祭
三日 午前十時 撰社福部社例祭
四日 午前十時 春祭(大祭式)
五日 午前十時 春季皇霊祭通拜式
六日 午前十時 撰末社春季祭
七日 午前十時 月次祭
八日 午前十時 梅風祭 八乙女舞奉納
九日 午前十時 夕神饗
十日 午前十時 撰社宰相殿社例祭

十一日 午前九時半 紀元祭
十二日 午前九時半 末社稲荷社 初午祭
十三日 午前九時半 月次祭
十四日 午後四時 梅花祭前夕饗
十五日 午前十時 梅花祭(中祭式)
十六日 午前十時 夕神饗

十七日 午前十時 野点茶会(午前十時〜午後三時)
十八日 午前十時 上七軒歌舞会奉仕
十九日 午前十時 月首祭
二十日 午前十時 撰社老松社例祭
二十一日 午前十時 撰社福部社例祭
二十二日 午前十時 春祭(大祭式)
二十三日 午前十時 春季皇霊祭通拜式
二十四日 午前十時 撰末社春季祭
二十五日 午前十時 月次祭
二十六日 午前十時 梅風祭 八乙女舞奉納
二十七日 午前十時 夕神饗
二十八日 午前十時 撰社宰相殿社例祭

「国宝 北野天神縁起絵巻」を読む

同志社大学文学部教授 竹居明男



「良香邸弓遊」の段

道真公、都良香邸にて弓射の妙技を披露する

「良香邸弓遊」の段

第二巻巻頭には「貞観十二年春陽の頃、都良香が家にて、門生等が弓遊びけるに」で始まる詞書がある。後に文章博士となった都良香（八三四〜八七九）は、官撰国史『日本文徳天皇実録』の編纂に携わり、詩文集『都氏文集』を遺した漢詩人・学者であった。貞観十二年（八七〇）、時に二十六歳の春を迎えた道真公が、たまたま、良香邸に集まった門人たちが「弓遊び」をしているところに通じかかった。門人たちは、日頃は机に向かっているばかりで、きつと弓の事など知るはずもなからうと思つて、道真公に試しに弓を射させてみたのである。ところが、公の弓を引く姿は中国の弓術の名人養由基を髣髴とさせるどころか、「二度放ち給へば二度中り、百度放ち給へば百度中る」有様で、良香以下、居合わせた人々は皆驚くばかりであった。

この段の詞書は「やがて、その年の三月廿三日に、献策しまし〜き。京の内の人々、目出たき例にぞ申し合ひ侍りける」で結ばれるが、これは道真公が方略試（中国や日本古代における官吏任用試験）を受験して、見事合格した史実を指している。この時の問頭博士（試験官）が都良香その人で、公の答案（『菅家文章』所収）や、良香の採点文（『都氏文集』所収）も幸いにして詠むことができる。

さて、以上の詞書に対応する画面では、右端の大きな的に向かつて、今しも弦を引き絞つて矢を放とうとしている、片肌脱いだ道真公のりりしい姿が描かれている。すでに、的の中央には一本の矢が刺さっているように見える。

左端近くの公の背後、鋪設された畳の上に、浅黄三重襷の直衣に香染めの指貫をはき、扇を手にしている人物が良香と思われるが、公の的との長い空間の上下（または左右）にも、居並ぶ良香の門下生や、的の傍らの矢取と思しい狩衣姿の人物と垂髪の童、さらには邸内に入り込んできたらしい男女の見物人の姿も目立つ。

こうした弓射の妙技を披露する先行図像に、『過去現在因果経絵』における悉達太子（釈迦）の、また「聖徳太子絵伝」における聖徳太子のそれが知られ、本段にもその影響が想定されるが、内容的には、やはり縁起文に先行する道真伝『北野天神御伝』の、公の妙技に驚いた良香が「射策鵠に中る徴なり」と予言した、というくだりに源流があると見られる。

吉祥院にて、道真公五十歳の賀の法会が催されたときの奇瑞

「吉祥院五十賀」の段

続く第二段は、一挙に道真公五十歳の話題に飛ぶ。すなわち「寛平六年長月の頃、門徒の人々、高きも賤しきも吉祥院に集まりて、五十の御歳の慶びの会



修せしめける時、法会の庭の面を見やれば」で始まる本段は、公五十歳の祝賀の法会にまつわる奇瑞を主題とする。

平安時代の貴族社会では、当時の平均寿命からして、四十歳以後十年ごとに高齢の祝賀を行う風習があった。ちなみに史実としては、この二十数年間の道真公の昇進・活躍はめざましく、文章博士となつた後、数年间は讃岐守として都を離れているが、任終えて帰京後は宇多天皇の拔擢により、前年の寛平五年（八九三）には父と同じく参議に昇進し、左大弁ほかの要職をいくつも兼任していたのである。

ここで舞台となつた吉祥院は、菅原家（氏）の伝統であつた吉祥悔過（吉祥天を本尊として罪過を懺悔する法会）を行なうために、父是善の晩年に創建された氏寺で、道真公逝去の後には、子孫一門によつてその霊を祀る天満宮へと変貌していった。現京都市南区に鎮座する吉祥院天満宮がそれである。

画面は吉祥院における法会の有様で、左端の本堂では、少僧都勝延（八二七〇九〇一）を導師とする法会の様相と、堂の廊下や階段の下・左右にひしめき合う多数の参列者を描く。中には僧形も目立っている。

一方、右端の門の内外にも、多くの僧俗の人々を



「吉祥院五十賀」の段

描くが、画面中央の中庭には、何人かの人々の視線を集めるかのように、烏帽子に浄衣姿の人物が赤地錦の巻物と袋とを捧げる様子が目立って描かれている。詞書によれば、彼こそ「藁沓・脛巾したる翁の、願文に沙金を取り添えて、漸う歩み寄りつゝ、」ある姿で、その老翁は、堂の前の机に願文と沙金を置いたかと思うと、何言うこともなく立ち去つてしまつたという。その願文を開けてみると、遠く「北闕（＝宮中）」よりも道真の限らない長寿を祈願する旨がしたためてあり、導師勝延も「もつたいたなくも天子様の主催と称しても同然」と感嘆し、「富楼那の弁説（富楼那は釈迦十大弟子の一人で、説法第一と称された）」をふるつたという。読経の音が響く盛大な法会の中の、緊張感みなぎる一瞬である。

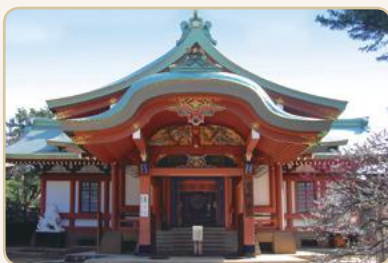
（つづく）

特別公開 『よみがえる天神信仰』 —— 北野天満宮の宝物』開催

「北野西京神人文書」の重文指定を記念した特別公開『よみがえる天神信仰 北野天満宮の宝物』が、史跡御土居「もみじ苑」の公開に合せ十一月一日から十二月七日まで宝物殿で開催され、多くの鑑賞者でにぎわった。

この特別公開では、国宝「北野天神縁起絵巻（承久本）」を始め当宮所蔵の数々の宝物に加え、今年新しく重文に指定された「北野西京神人文書」（中世に酒麴生産の独占権を持っていた北野社の神人に伝来してきた文書）が初公開された。

なお、この特別公開は来年一月十日から三月下旬にかけても開催される。



梅風会だより



●桜井市の天満神社本殿竣工奉祝祭

加藤権宮司が参列

桜井市河西の天満神社(佐藤高静宮司)の本殿竣工奉祝祭が十一月九日午前十時から同神社拝殿で斎行され、当宮の加藤迪夫権宮司が来賓として参列、玉串拝礼した。

同神社は、菅公を祭神とする古社であり、約三百年前の「享保元年丙申十年宮座講年中行事帳」に書かれている祭祀が、現在に至るまで代々宮座組織によって執り行われている。建築後百数十年たった本殿が老朽化し、建て替えていた。

祭典後、加藤権宮司が「この度の御本殿の新築は、佐藤宮司、河合淳好様を始めとする宮座議員の皆様方の天神様を思う篤い

気持ちと並々ならぬご努力の賜物。今後

益々天満神社が発展されることをご祈念申し上げます」

との橘重十九宮司の祝福の挨拶を代読し

た。



奉納

●平成二十七年年賀はがき

「北野天満宮と梅」がモチーフに

日本郵便株式会社近畿支社(徳茂雅之執行役員近畿支社長)が、平成二十七年用年賀葉書発行にあたり「北野天満宮と梅」をモチーフにした葉書原画を奉納され、十月三十日午後一時より御本殿において日本郵便職員約十五名の参列にて奉納奉告祭を斎行した。



描かれた画は、当宮重要文化財である三光門に紅梅白梅が華やかに描かれ、迎春に相応しいデザイン。平成二十七年寄附金付絵入年賀葉書(京都府版)として発行される。

ボーイスカウト第八十五団だより

●各隊自慢の料理作り

ボーイスカウト京都第八十五団(本部当宮)の秋の団行事として、ビーバー隊・カブ隊・ボーイ隊合同によるアイデア料理作りが十一月二日午後一時よりスカウトハウスにて約二十名のスカウトが参加して行われた。

今回は「自慢の創作料理」と題して、各隊がそれぞれ調理。味や見た目などを競った。

普段は各々隊ごとの活動だが、今回はビーバー・カブ・ボーイが一緒に取り組む行事ということで、スカウト同士の交流も深まる中、有意義な団行事であった。



神若会だより

●終い天神にて一年の叩き納め

地元の子供たちに和太鼓体験も

終い天神の十一月二十五日、北野天神太鼓会は午後六時から神楽殿にて縁日恒例の太鼓奉納を行った。

一年最後の締めくくりに飾る奉納で、「翔龍」「座論梅」などを含む約十曲を演奏し、縁日で盛り上がる参拝者の耳を楽しませた。また演奏の後には、聴きに來ていた子供たちに和太鼓体験を行うなどの交流を深めた。



月釜 献茶 (一月一日～四月三十日)

○二月

一日	献茶祭保存会	休会
十五日	献茶祭保存会	敷内燕庵社中(明月舎)
十八日	松向軒保存会	休会
二十五日	梅交会	郡 宗由 (松向軒)
	紫芳会	休会 (松向軒)
一日	献茶祭保存会	藤原 宗順 (明月舎)
八日	梅交会	吉岡 宗美 (松向軒)
十五日	献茶祭保存会	谷口 宗嘉 (明月舎)
二十二日	松向軒保存会	藤井 宗恵 (松向軒)
	紫芳会	土屋 宗昭 (松向軒)

○三月

一日	献茶祭保存会	官和会 (明月舎)
八日	梅交会	濱内 宗厚 (松向軒)
十五日	献茶祭保存会	北野 宗道 (明月舎)
二十二日	松向軒保存会	榊 宗代 (松向軒)
	紫芳会	布施 宗青 (松向軒)
一日	献茶祭保存会	大塚 宗香 (明月舎)
五日	梅交会	未定 (松向軒)
十五日	献茶祭保存会	木村 宗光 (明月舎)
二十六日	松向軒保存会	森田 宗圓 (松向軒)
	紫芳会	鬼塚 宗節 (松向軒)

○四月

天神さん 思い出写真館



一千年大萬燈祭は明治三十五年三月二十五日から五月十三日まで五十日間にあたり、斎行された。一枚は楼門前の賑わい、もう一枚は神楽殿前の風景である。みんな和服に下駄の装い。日露戦争の始まる二年前、百十余年前の大萬燈祭のスナップ写真には、明治の日本の姿が写し出されている。

いるのだろう。一般家庭にカメラもなく撮影そのものが珍しかった時代である。神楽は久しく途絶えていたが、この一千年祭を機に復活して

おり、期間中奉納された神

楽は総計二千九百二十五座に達したという。晴天で式典のあった日は百座以上という記録もあり「黎明より夜十一時ごろまで間断なく鼓笛の音境内に響き渡る」と賑わいぶりがつづられている。



正式参拝された皆様（敬称略）（十一月～十二月）

十月	二十五日	滋賀県びわ南学区氏子総代会
十一月	七日	烈々布神社氏子総代会
十一月	十日	大原天満宮氏子総代会並びに 大原天満宮講員 尚史会
十一月	十一日	神宮研修所
十一月	十一日	深志神社
十一月	十二日	国際ソロプチミスト小田原
十一月	十二日	尾山神社
十一月	十五日	山村神社御伝人衆
十一月	十七日	鯖江ロータリークラブ
十一月	十七日	平安ロータリークラブ
十一月	十八日	荏柄天神社総代
十一月	十九日	岩津天満宮崇敬会
十一月	十九日	豊後会
十一月	二十日	綴喜神社総代会
十一月	二十三日	天神真楊流柔術
十一月	二十六日	仏教美術研究会
十二月	四日	高知県神社庁伊勢神宮 新穀感謝祭参拝団
十二月	六日	東日本ヤクルト協会
十二月	十六日	京都府神社庁役員会

挙式された皆様

（十月二十六日～十二月三十一日）

新郎新婦様、御両家の皆様

末永いご多幸をご祈念申し上げます。

十月	二十六日	豊川 禮成・永子	ご夫妻
十月	二十六日	澤田 仁・加奈子	ご夫妻
十二月	七日	原 康祐・くにこ	ご夫妻
十二月	七日	小林 真吾・由祈英	ご夫妻
十二月	十三日	石見宗一郎・映理	ご夫妻

天神さんの細道

天神さん七不思議 へその三ツ

唯一の立ち牛

菅原道真公（天神様）は、承和十二年（八四五）六月二十五日の御誕生であるが、この年は「丑歳」に当り、且つ菅公の伝説には牛にまつわる話が数多く存在するとも牛にまつわる縁起が多く伝えられ、牛は天神様の神使（お使い）となっている。

中でも



延喜三年（九〇三）九州太宰府で御生涯を閉じられた菅公の御遺骸をお運びする途中、車を引く牛が座り込んで動かなくなったため、近習達がいよいよその付近の寺院安楽寺に埋葬したのだが、この故事により境内各所にある神牛の像は臥牛（横たわった牛）の姿となっている。ところが、拝殿欄間の彫刻には、当宮では珍しく立った牛の姿の神牛が刻まれている。何故一頭だけ立像の牛があるのかは神秘的で今もって謎とされるところである。

応永年間の酒屋交名
―「北野西京神人文書」より―

この酒屋交名は、前回紹介した酒屋請文と同様、昨年五月に国の重要文化財に指定された「北野西京神人文書」のうちの一点であり、応永年間（一三九四〜一四二七）に酒麴役を徴収するために作成された洛中洛外の酒屋の名簿である。

そこには応永三十二年（一二四五）十一月十日付けで三二五名、その後に応永三十三年二月十六日付けで二十二名、総計三四七名の洛中洛外の酒屋の名前が書き上げられている。ただこの名簿は、写であり、文書の真ん中あたりの紙継ぎ目に欠落を思わせる箇所があり、だとすれば酒屋の数はこれよりさらに増えることになる。

酒屋交名の表記の仕方は、次にあげる冒頭二人の記載のように、
衛門 近衛高倉東北頼

国次 在判

紹 六条坊門室町東北頼

隆重 在判

（後略）

と、右肩に通称あるいは受領名と所在地を記し、次行に酒屋の名と判とが記されている。（写真参照）

天満宮 歴史の一齣

京都大学名誉教授

藤井 譲治

この酒屋交名によれば、当時、酒屋は大宮から東京極大路の間の左京にほとんどがあり、右京にはわずしか見られない。左表は、酒屋の展開を東西の通ごとに北から南へと順にその数を示したものであるが、これによると酒屋は、一条通から六条通まで広く展開しているが、なかでも三条通から五条通により多くあったことがわかる。

南禅寺、聖護院、三聖寺、賀茂各一軒を数えることができる。
ちなみに北野周辺では、北野北大路西南頼一軒、北野南大路東南頼二軒、北野今在家北西頼一軒の計四軒があり、また麴座のあった西京でも一保北頼に一軒あった。

洛外では、嵯峨の一六軒が際立つが、そのほか清水六軒、今熊野五軒、北野四軒、仁和寺四軒、法性寺三軒、建仁寺二軒、栗田口二軒、岡崎二軒、

このように酒屋交名は、当時の洛中だけでなく洛外における町場の展開やその繁栄の様子的一端を示してくれており、酒屋請文とともに極めて貴重な史料である。

【表】洛中の酒屋、通別分布

通 名	軒 数
一条	9
正親町	3
土御門	7
鷹司	8
近衛	8
勘解由	11
中御門	9
春日	8
大炊御門	10
冷泉	11
二条	10
押小路	6
三条坊門	8
姉小路	6
三条	15
六角	9
四条坊門	8
錦小路	13
四条	21
綾小路	11
五条坊門	16
高辻	8
五条	22
樋口	8
六条坊門	2
楊梅小路	4
六条	10
左女牛	1
七条坊門	0
北小路	0
七条	6
塩小路	2



酒屋交名（巻首）

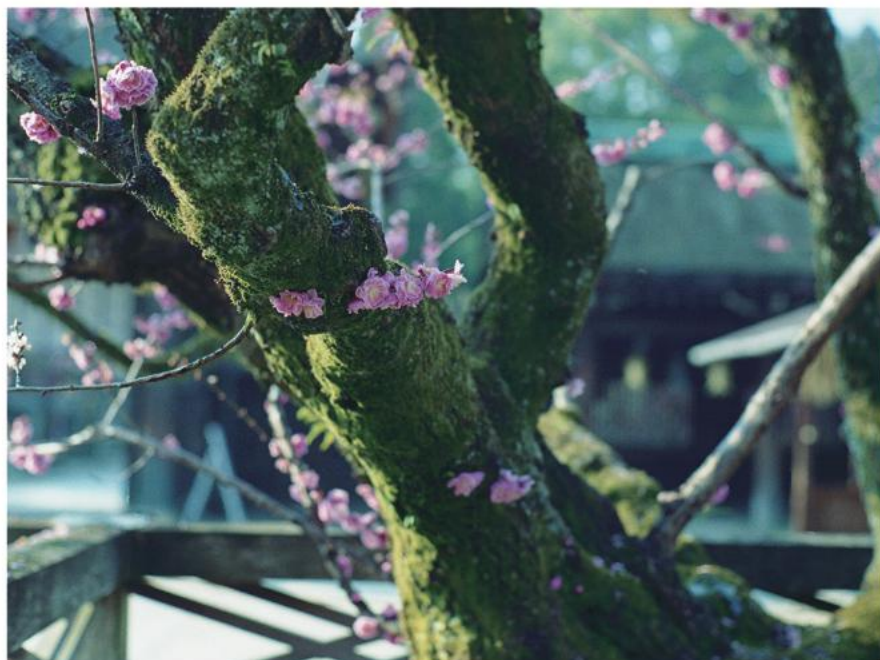
菅原道真公ゆかりの梅 全国屈指の 梅苑を公開

史跡「御土居」も同時公開

菅公は、幼少より学問に励み、「和魂漢才」の心をもって、情緒豊かな和歌を詠み、格調高い漢詩を多く作られています。

美しい 紅の色なる 梅の花
あこが顔にも つけたくぞある
菅公は梅をこよなく愛されました。境内には菅公ゆかりの梅が、春の訪れを知らせるかのようには咲き誇っています。

当宮の梅苑は全国屈指の景勝地として、毎年多くの観梅者で賑わいます。境内神域には五〇種一五〇〇本



天神 さんの 梅開き

梅苑開き

紅梅、白梅、一重、八重……
50種類、約1500本の梅が咲き競う。

梅苑公開

平成27年2月上旬～3月下旬
午前10時～午後4時まで(梅苑菓子付)
大人 600円(中学生以下 300円)

宝物殿特別展開催

「よみがえる天神信仰
北野天満宮の宝物
―国宝・重要文化財の数々―」
1月10日～3月下旬



梅花祭

平成27年
2月25日(水)

〔祭典〕
午前10時～午前11時まで
〔野点茶会〕
午前10時～午後3時まで
野点拝服券=1,500円

ようこそ、天神さまの総本社へ
北野天満宮

梅花祭

平成二十七年二月二十五日

〔祭典〕午前10時～午前11時

〔野点茶会〕午前10時～午後3時

◎野点拝服券 一、五〇〇円

(拝服券・宝物殿拝観券・撒換引換券付)

菅原道真公は、承和十二年(八四五)六月二十五日にご誕生になり、延喜三年(九〇三)二月二十五日に薨去されました。この縁により、毎月二十五日はご縁日としてご遺徳を偲び、特に祥月命日に当たる二月二十五日は「梅花祭」と称して祭典を厳肅に営んでいます。この日は境内において、午前10時より午後3時まで上七軒の芸妓・舞妓による「梅花祭野点大茶湯」が催されます。



程の梅の木があり、早いものは一月頃から一輪また一輪と花を咲かせます。そして見頃を迎える二月上旬から三月下旬にかけて境内一円は梅の馥郁たる香りに包まれます。

また、開苑期間中は隣接する史跡「御土居」(太閤秀吉公が都の整備に築いた土塁)も同時公開します。

◎公開期間／平成二十七年二月上旬～三月下旬

◎入苑時間／午前10時～午後4時

◎入苑拝観料／大人 600円・子ども 300円

梅の枝「思いのまま」

昨年の初天神で約六十年ぶりに復活した招福の梅枝「思いのまま」を今年は元旦からの授与。

かねてから「剪定された御神木の枝を授与してほしい」との声が崇敬者から強く寄せられており、千五十年大萬燈祭（昭和二十七年）の年に初天神で参拝者に授与していた経緯があったことから、昨年の初天神で約六十年ぶりに授与を復活させた。

「思いのまま」には、菅公を偲ぶ梅花祭で神前に供える特殊神饌の調製に用いる厄除けの玄米が入ったヒョウタンを取りつけ、家庭に春の訪れと幸せを呼んでほしいとの願いを込めている。



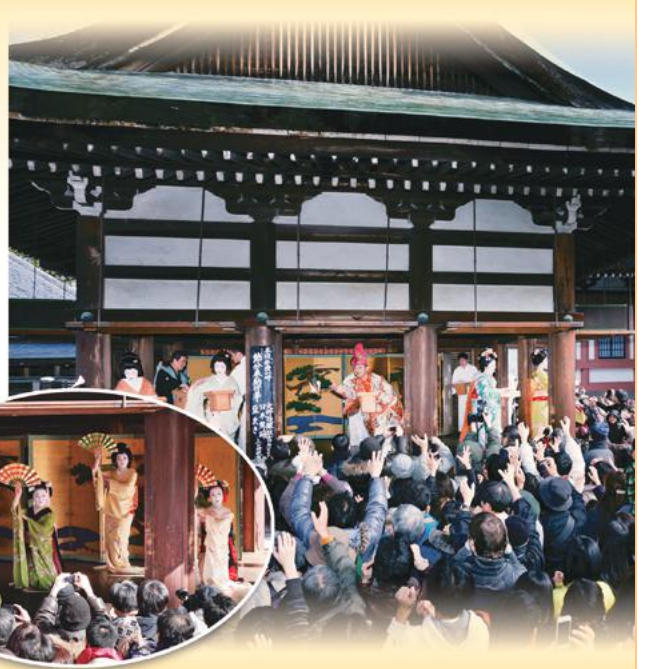
今年は元旦からの授与

節分祭と追儼式

二月三日、午前十時から本殿で節分祭を斎行、一年間の災厄を祓い、午後一時から神楽殿で茂山千五郎社中によって伝統の「北野追儼狂言」が奉納される。上七軒歌舞会の芸舞妓による日本舞踊の奉納もあり、最後に出演の狂言師と芸舞妓が神楽殿の上から威勢よく豆をまく。



当宮は京都の「乾（北西）の隅」の守り神として創建されて以来、災難よけ・厄除けの社としても篤い信仰があり、節分には「四方詣り」と称して当宮など四社寺を参拝して無病息災を祈る習慣が根付いている。



御縁日 境内ライトアップ



毎月25日は天神さんの御縁日。夜9時まで境内特別ライトアップ！

定期購読のお知らせ

- 定期購読 1,000円（1年分）季刊・年4回発行
- 学校・教育機関でお申込みの場合は無料発送。
- お申込み・お問い合わせは、社務所まで。

今昔マップ



平安京

当宮は平安京の乾に位置し、古くより天のエネルギー、パワーの働く北野の地に祀られています。

平安京の内裏、大極殿北西に位置し三光門の真上に北極星が輝き、天子様が北極星を拝する聖なる社でした。

平安京の大極殿（遷都より600年の間）は今の京都御所の西にありました。

紙屋川、堀川に挟まれ、すぐ北西に当宮が建てられています。

- 平安京（大内裏）
- 大極殿（室町時代迄の平安京）
- 京都御所（室町時代以降）

